
その時まで。

桜華蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その時まで。

【Nコード】

N9558B

【作者名】

桜華蒼

【あらすじ】

ある日突然灰原の声がなくなり、新一は見舞うが……

（前書き）

哀ちゃんと新一くん。場合によっては連載に発展するかも。『たとえば』の感想が嬉しくて久しぶりに投稿しました。御礼のつもりですが、Love度は低し。想いつて一方通行？

くどうくん、と。さらつと流すように丁寧な言葉が、
声で、俺を何度も救ってくれていたのだと。

気付くのはいつも無くしたあとだ。

博士が泣きながら灰原の声が出なくなったのだと、病院で語った。
原因はわからないまま、翌朝目が覚めたらこんなことになってたらしい。

「入るぞ」

当の灰原は落ち着き払った様子で、見舞いに訪れた俺を一瞥して
絵本をパラパラめくる。

看護師さんの差し入れがテーブルにはいくつもの童話の本が無造
作に置かれていた。

「平気か？」

灰原はターントーブルに置かれたスケッチブックに手を伸ばし、
開いて（名探偵ってヒマなのね）と書く。

「お前が心配で来たんだよ」

彼女は、俺にペンを渡しスケッチブックの自分の字の下辺りをト
ントンと指で叩く。

「書けつての？」

こくりと頷くものだから、俺はベットの端に掛けて言った言葉を
綴る。

（別にたいしたことないでしょ。みてのとおりよ。たくさん事件が
待ってるんだから早くいけば？）

（なにかあったんだろ？）（しつこいわよ）

（昔からそーだよな）

（なにが？）

（都合悪くなると俺のこと遠ざけようとする）

スケッチブックから顔を上げると、曇った瞳と視線がぶつかる。

（ま、いーけど。）

俺は書いて紙をめくる。（それよか、天気もいいし、出掛けよーぜ）

（どこに？）

（米花科学館）

（昨日からプラネタリウムの内容が新しくなったつてさ。ホームページに載ってた）

（服もないのに？）

（黒羽からワンピース預かってるぜ）

（それ観たらティアナで Pasta 食べねえ？）

（帰りにオメーの好きなノクターンに寄って紅茶飲んでさ）

（夜はミートローフを作るか）

「あらあら？ デートの約束？」

いつの間にか背後にいた医師が笑みを称えて悪戯っぽく聞いた。

「そーです。俺ら付き合ってるから」

真顔で言った俺に彼女はそっかぁ、と呟くといきなり屈み込んで額にデコピンをかました。

突然の痛みになぐさると真摯な声が降ってくる。

「失格」

「なにが、ですか？」

「恋人失格。――だめじゃない。小学生が過労で倒れるなんて普通考えれないわ。親御さんには心配かけたくなくて無理に取り繕うことだってあるでしょ？」

気付かないの、とは言われなかったけれど。ずきん、と響いた胸の痛みが灰原を見遣る。

「症状は声だけだからね。帰りがかったらいつでも帰ってもいいわよ」

引き戸に手を掛けた彼女は一度振り返り少し笑う。

「私もあんまり好きじゃないわ」

ドアが閉まった後で俺は彼女が見ていた視線を追った。重なった

本とは別に脇に一冊の本。『人魚姫』

助けてもらった相手を勘違いし、別のお姫様と結婚した王子。声が出せない人魚姫は事実を打ち明けることなく海の泡となった。

（想いを伝えるのは言葉だけじゃないでしょう）

俺の視線を辿った灰原はサラサラ綴った。

（俺は待つって言ったよな？）

同じように解毒剤を飲んだのに、灰原には効かなかった。

「やめたんじゃないのか、研究」

（やめれない）

「なんでだよ」

（早く、あなたと並んで歩きたいから）

何を言えば、どうすれば灰原に届くんだろう。

正直悲しくなった。こんなに近くににいるのに、心の距離の遠さが哀しい。

「作った解毒剤を飲んだんだろ？」

（でも、ダメだった）

しょぼんと俯く灰原の左手を握りしめる。

（俺のこの手は灰原と繋ぐ為にあるから）

手元に引き寄せたスケッチブックに書いて閉じる。

「俺、灰原に名前呼ばれるの好きだよ。コナンの時からずっと、その声が俺を救ってくれてた。だから、今は俺が何度でもお前の名前を呼ぶから。灰原」

偽りの名前だと彼女は言うけれど、彼女を大切に思う人と、変わろうと自身がつけた誓いのような共作。

今度は俺が力になりたい。どんなに時間が経っても変わらないものがあると彼女が気付くまで――。

End

（後書き）

もう久々すぎて文がよれよれ。ずっと哀ちゃんは好きなんです、
愛が追いつかない（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9558b/>

その時まで。

2010年10月15日22時15分発行